

# トニ・モリスン（1931-2019）の「他者」へのまなざし

森 あおい

## はじめに

2019年8月6日に88歳の生涯に幕を閉じたトニ・モリスンは、1993年にアフリカ系アメリカ人女性として初めてノーベル文学賞を受賞したことで大きな注目を浴びるようになった。作家、作詞家、エッセイスト、文芸評論家、編集者また教育者として活躍したモリスンの半世紀に及ぶ経歴の原点にあるのは、1989年にボニー・アンジェローと行ったインタビューのタイトルとなっている「黒人であることの痛み」(“The Pain of Being Black”)である。白人優越主義の痛みを自ら体験しているモリスンのまなざしは、さらに主流社会から追いやられた「他者」へと向けられる。本発表では、モリスンの来歴を踏まえた上で、主流社会によって周縁化され、見えない存在とされている「他者」の存在をモリスンが回復する過程を、プリンストン大学ファイアストーン図書館所蔵のトニ・モリスン・ペーパーズ<sup>1</sup>やモリスンのエッセイ集『自尊心（自己肯定）の源泉』(*The Source of Self-Regard*) (2019)、『他者の起源』(*The Origin of Others*) (2019)等に収められた資料を基に検証する。

## 1. モリスンの来歴

モリスンは、1931年2月にオハイオ州の小さな工業都市ロレインで生まれた<sup>2</sup>。ロレインは地理的には中西部に位置し、北は海のように広大なエリー湖を挟んでカナダと接している。奴隷制時代には、自由を奪われた暮らしを強いられていた奴隷にとってカナダは、希望の土地を意味していた。奴隷制から逃れるために命がけで南部のプランテーションから脱出した人々は、オハイオ州を経由してカナダをめざした。このような奴隷の逃亡を組織的に援助する地下鉄道のアメリカの終着駅が、モリスンの生まれ故郷ロレインの近隣には点在していた。中でもロレイン近郊の町、オバリンの町のいたるところに地下鉄道や奴隷制廃止運動に関する史跡が残っている。

いわばコミュニティ全体が団結して奴隷制廃止運動に関わった歴史を持つ非常にリベラルな地域で育ったモリスンだが、ロレインに人種差別がなかったわけではない。モリスンの第一作『青い眼がほしい』(*The Bluest Eye*) (1970) は、1930年代のロレインをモデルとした町を舞台に展開されるが、ダウントウンにある映画館は人種隔離されていたことが示唆されている。また、主人公ピコーラの母がメイドとして働く白人の家は、風光明媚なエリー湖湖畔に位置する瀟灑な邸宅として描かれているが、その家は白人専用の居住区にあり、その地区にある手入れの行き届いた美しい公立公園で黒人の子どもたちが遊ぶことは禁じられていた。

## 2. 文学を通しての人種主義に対する挑戦

このような幼少時代の人種差別の体験が、モリスンの著作の原点にあり、1980年後半か

ら1990年代初めにかけて発表された論考「語りえぬ、語られぬ物」(“Unspeakable Things Unspoken”) (1988) や『白さと想像力』(Playing in the Dark) (1992) は、黒人の存在を排除してきた白人中心的なアメリカ文学のキャンソンの見直しを求めている。さらに1994年にプリンストン大学で開催されたシンポジウムの基調講演、「人種の問題」(“Race Matters”) では、自らを人種に関連した作家 (raced writer) と位置づけ、人種差別に文学や想像力の力で挑戦する姿勢を示している。

モリスンの小説の多くは、アメリカの植民地時代や奴隷制の時代、南部再建期、ジム・クロウや公民権運動の時代を背景に、アメリカ史では不可視とされた人々に光を当てている。たとえば、ピューリッツァー賞受賞の『ピラヴド』(Beloved) (1987) は、モリスンが編集者時代に発見した『アメリカン・パプテスト』紙に報じられた記事、「逃亡奴隷マーガレット・ガーナーの子殺し事件 (1855)」を基に執筆された。マーガレットをモデルとした主人公セサは奴隷に対して寛大なガーナー夫妻が経営する農園で働いていたが、夫妻の死後やってきた残忍な「先生」から逃れるために、子どもを連れて命からがらオハイオ州シンシナティへ逃亡する。しかし、逃亡先で自由を手にしたと思ったのも束の間、捜索隊に捕まりそうになり、子どもが再び奴隷制に連れ戻されることを恐れたセサは、とっさに自ら子どもの命を奪う。その結果、周囲から非難の目で見られ孤立していく。子殺し自体は決して正当化される行為ではないが、制度化された人種主義の下、自らの手で我が子を殺めざるを得なかった主人公の心理をモリスンは資料を元に描出し、人間性を剥奪する奴隷制の残虐性を詳らかにする。

### 3. 9.11 アメリカ同時多発テロと他者へのまなざし

2001年に起きた9.11アメリカ同時多発テロ事件以降、モリスンの視線は、自らの出自に関わる人種問題だけでなく、異なった文化的、宗教的、政治的背景を持つ他者、すなわち移民や外国人にも向けられるようになってきている。この視線の転換は、同時多発テロ以降差別の対象となった「外国人」をモリスン自身が、身近な存在として意識するようになったことの表れと言えるだろう。同時多発テロが発生した当時、モリスンはニューヨーク・シティと、教鞭を執るプリンストン大学があるプリンストンを行き来する生活を送っていた。プリンストンは、ニューヨーク・シティへの通勤圏内にあり、犠牲者にはプリンストンの住人も含まれていたという。自分が暮らし、関りのあるコミュニティの人々が犠牲になったこの事件は、モリスンにも大きな衝撃を与えたと考えられる。

同時多発テロ事件2日後の9月13日には、プリンストン大学で犠牲者追悼のためのメモリアル・サービスが執り行われ、モリスンは犠牲者への鎮魂歌とも言うべき、「9月11日の死者」(“The Dead of September 11”) というタイトルの詩を朗読した。この詩でモリスンは、「もし勇気を奮い起こすことができれば、亡くなった人々に直接語り掛けたい—9月11日の死者—地球上のすべての大陸で生まれた先祖を持つ子どもたち—アジア、ヨーロッパ、アフリカ、そしてアメリカで生まれた先祖の子孫たち……」(3) と死者を弔う。当時、メディアではこのテロ事件をパールハーバーの奇襲攻撃に例えて反日感情を煽ったり、また、巷では外見から判断してイスラム系と見られる人々に対するヘイトクライムが多発したことを考えると、モリスンが、アメリカ

という国の枠を越えて、出自に拘わらず個々の犠牲者に哀悼の意を示していることは特筆に値する。

### 終わりに

モリスンの遺作となるエッセイ集『他者の起源』は、奴隷制にまつわる記録や文学、個人的な逸話から他者の存在について検証している。同書の最終章、「外国人の家」<sup>3</sup>では、奴隷制が終わって150年以上たった現在では、「グローバリゼーション」という名のもとに、宗教、政治、階級、ジェンダー等、異なったバックグラウンドを持つ他者に対して、搾取と排除のメカニズムが働き、それが正当化されていることが指摘されている。だが人々を分断させる差異も、人間が「『人類』」という一つの種に属している」(Morrison, *The Origin of Others* 15) ことを考えれば何ら問題にはならないはずである。「外国人の家」が、異質な存在を排除するのではなく、他者との連帯を促し、共生する空間となったときに、多様な文化が交じり合った新たな文化構築の可能性が見えてくる。

### 〈注〉

- 1 2014年にプリンストン大学がモリスンから譲り受けた、未刊のものも含めたモリスンの講演や小説の原稿、執筆のための資料、手紙や写真オーディオ資料等が収められたコレクション。全部で300箱以上のファイルケース等に収められている膨大な量の資料が、同大学ファイアストーン図書館によって整理され、2016年から同図書館で閲覧できるようになっている。
- 2 モリスンの生い立ちや作品については、晩年に公開されたドキュメンタリー・フィルム『断片化された私』(The Pieces I Am)が参考になる。
- 3 モリスンが最初に「外国人の家」という表現を使ったのは、2002年5月にカナダのトロント大学で行われたアレクサンダー・レクチャー・シリーズでのことだった。トニ・モリスン・ペーパーズに収められているファイル、「外国人の家—略奪された所有権の文学に関するエッセイと講演：2003年頃」(“The Foreigner’s Home: Literature of Dispossession Essays and Lectures; circa 2003”)には、2003年頃にモリスンが認めた「外国人の家」についてのメモや原稿の下書きが含まれている。『他者の起源』は、モリスンが20年近くにわたって考察を重ねた「外国人の家」の概念を集約したものだと言える。

### 〈参考文献〉

- Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Knopf, 1987. 『ビラヴド』(吉田廻子訳) 集英社 1990.
- . *The Bluest Eye*. New York: Holt, 1970. 『青い眼がほしい』(大社淑子訳) 早川書房 1994.
- . “The Dead of September 11,” *The Source of Self-Regard*. New York: Knopf, 2019, pp. 3-4.
- . “The Foreigner’s Home: Literature of Dispossession.” Toni Morrison Papers, C1491, Manuscripts Division, Department of Rare Books and Special Collections, Princeton University Library.
- . *The Origin of Others*. Cambridge: Harvard UP, 2017. 『他者の起源』(荒このみ訳) 集英社新書 2019.
- . “The Pain of Being Black.” *Time* 22 May 1989: pp. 46-48. 「黒人であることの痛み」『現代作家ガイド4 トニ・モリスン』(森あおい訳) 彩流社 2002. pp33-41.
- . *The Pieces I Am*. Dir. Timothy Greenfield-Sanders. New York: Magnolia Pictures, 2019. Film.
- . *Playing in the Dark*. Cambridge: Harvard UP, 1992. 『白さと想像力—アメリカ文学の黒人像』(大社淑子訳) 朝日新聞社 1994.
- . “Unspeakable Things Unspoken.” *Michigan Quarterly Review* 28(1) (Winter 1988), pp. 1-24.
- 森あおい「『青い眼がほしい』再読——時空を超えて甦るある少女の物語」『ユリイカ』2019.10, pp. 74-83.